

自閉スペクトラム症者における試験時間延長による 学力テスト変化に影響を与える要因（2）

脇浜幸則¹ 大野愛哉^{1, 2} 横田晋務³ 稲田尚子⁴ 面高有作³ 鈴木大輔⁵ 立脇洋介³ 川口智也³ 田中真理³

1 九州大学人間環境学府 2 日本学術振興会特別研究員 3 九州大学 4 帝京大学 5 東北大学

KEY WORDS: 自閉スペクトラム症 時間延長 ASD 特性

【問題と目的】

発達障害の中でも、ASD はその特性や状態像が多様であるため(Wing & Attwood, 1987)、試験における合理的配慮の提供にあたっては、認知機能や状態像の把握が必要不可欠である。さらに、連番発表(1)より、ASD 者には一律の時間延長ではなく、状態像に応じた配慮が必要であることが示唆される。時間延長という合理的配慮は、正解は分かるが時間が不足している場合に特に必要である。したがって、本研究では、通常条件における学力テスト得点が全国平均に近い ASD 者を対象に、特に時間延長が必要と考えられる特性および状態像について、ASD 者の個別事例より示唆を得ることを目的とする。

【方法】

調査対象者・分析 連番発表(1)の ASD 者 13 名において、試験時間の延長により学力テストの得点の増加が見られた 9 名のうち、時間延長なしの得点がセンター試験の全国平均点 118 点以上かつ ASD 者の中で最も延長条件の得点が高かった 2 名を抽出し、事例的な検討を行なった。対象者は連番発表(1)の Group2 のうち、A(男性、18 歳 9 ヶ月)と B(男性、19 歳 9 ヶ月)であった。

課題 連番発表(1)の通り。

【結果】結果を以下の Table1 に示す。

Table1 A、B の各課題の結果

課題		A	B
学力テスト	普通条件	134	168
	得点 延長条件	145	174
ADOS	Social affect	6	7
	RRB	5	1
	total	5	5
WAIS	VC	144	141
	PR	110	118
	WM	96	117
	PS	116	102
他機関から数値のみ情報提供のため様子不明。		制限時間を気にする様子や、素早い処理が求められる課題で自身の成績を気にする様子が見られた。	
検査時の様子			
CANTAB	SSTDES(抑制機能)	42	36
	ASD平均40.39(3.8)		
	SSPFTE(視覚記憶:順再生)	5	9
	ASD平均13.07(8.09)		
	SSPRTE(視覚記憶:逆再生)	4	4
	ASD平均11.13(6.17)		
	SWMTE468(視空間WM)	2	13
	ASD平均8.47(9.10)		
	IEDTTA(認知的柔軟性)	233	109
	ASD平均112.8(55.25)		
困り感アンケート	最初の課題時には手を硬く握るなど、新奇課題への緊張の強さが見られた。	IEDにおいて、ルールが切り替わった際に動揺していたものの、ルールを理解した後は落ち着いて取り組んだ。	
	ASD困り感得点	28	19
	ASD平均34.47(19.32)		
	ASD困り感：(自閉的困り感)突然予定が変更 (自閉的困り感)生活のリズムが		
	得点の高い項目 (一部) されると混乱してしまう。 乱されるのは苦痛だ。		
	テスト困り感得点	74	41
	ASD平均69.87(22.92)		
	テスト困り感：(こだわり・強迫) 問題文を正しく読めているはずなのに、何	(注意・集中)口頭だけで説明されると内容が理解できず困る。	
	得点の高い項目 (一部) 度も確認してしまう。		
AQ	社会的スキル	10	4
	注意の切り替え	9	6
	細部への関心	3	5
	コミュニケーション	7	3
	想像力	6	5
AQ合計得点		35	23

※ ()=SD、CANTABの数値はエラー数を表す。

A の状態像 A は認知特性として、言語的な理解は得意であるも

の、聴覚情報の保持は苦手であることが窺えた。さらに、CANTAB における IEDTTA のエラー数の多さや AQ の切り替えの得点の高さから、柔軟な思考や切り替えにおける難しさが推察された。また ASD 特性として、新奇場面への不安や、問題を何度も確認するなどの強迫的行動があると考えられた。

B の状態像 B は認知特性として、WAIS の結果より言語的理解は得意であるものの、素早い情報の処理が苦手であることが窺えた。また、素早い処理の苦手さは、成績への不安につながっていることも推察された。ASD 特性として、CANTAB 時の様子や困り感アンケートの回答より切り替えの難しさが、ASD 困り感の回答より自身の習慣へのこだわりがあると考えられた。加えて、テスト困り感より聴覚情報のみでは情報を理解することの難しさがあると考えられた。これらの特性や、ADOS における比較得点から、中度の ASD であると考えられるが、困り感アンケートや AQ の得点は低く、適切な自己モニタリングの難しさが推察された。

【考察】

テストにおける合理的配慮が必要な特性として、主に以下の 3 つが示唆された。**①言語理解と他の合成得点とのディスクレパンシー**：英語試験は言語能力を測定することを目的としていると考えられる。しかし、本事例 2 名のように VC(言語的な情報や知識を状況に合わせて使用する力)に比べて、WM、PS の領域が苦手である ASD 者は、問題文を何度も確認することや、解答の記述に時間を要することが想定されるため、試験時間が十分でない場合、本来有している言語能力が発揮されにくい可能性が考えられる。そのため、これらの認知的特性に対しては、時間延長の合理的配慮を講じる必要があると言える。**②切り替えの難しさ**：A、B はともに切り替えの難しさがあると考えられる。これは、連番発表(1)における認知的柔軟性の低さと関連していると考えられる。さらに B は CANTAB における様子より、切り替えが難しく動揺しやすいことも考えられるため、時間延長により問題形式の変更に対応する時間を設けるなど、安心して試験に取り組む環境を提供する必要性が示唆される。**③こだわり・強迫**：A は強迫的な確認傾向が、B は習慣へのこだわりが窺えた。ASD 者は二次障害として強迫症状を呈しやすいことが指摘されている(Piven & Palmer, 1999)。特に A は問題文を何度も読み直してしまうことから、試験において必要以上に時間を要していることが推察され、強迫行動が試験のパフォーマンスに影響を与えている可能性が推察される。したがって、ASD 者のこだわりや強迫傾向は試験時間延長の根拠になりうると考えられる。

以上より、これらの特性は試験における時間延長の合理的配慮が必要な根拠になると考えられるが、B の状態像より ASD 者の試験への合理的配慮として、視覚的な情報の提示も必要である可能性が考えられる。また、B は自身の困り感やニーズが低いという点も特徴的である。したがって、ASD 者の試験における合理的配慮の提供にあたっては、主観的な困り感と、WAIS や CANTAB、ADOS などの客観的な指標による包括的評価が必要であると考えられる。

本研究は科学研究費補助金の助成(JSPS KAKENHI Grant Number 18H01090)をうけた。(WAKIHAMA Yukinori, OHNO Aikana, YOKOTA Susumu, INADA Naoko, OMODAKA Yusaku, SUZUKI Daisuke, TATEWAKI Yosuke, KAWAGUCHI Tomoya, TANAKA Mari)